

学んだ知識と目の前の事実



経団連ダイバーシティ推進委員長
SWCC 会長

はせがわ たかよ
長谷川隆代

40年以上前、まだ大学生だった頃のことである。当時は工学部に進学する女子学生は非常に少なく、私が卒業した大学では2%に満たなかった。それでも、何か新しいものを見つけること、実験を通して物質の中で起きていることを知ることに興味を抱き、工学部に進んだ。座学も楽しかったが、何よりも実験は楽しかった。それと同時に自分の不器用さを改めて知ることとなり、化学分析には手こずった記憶がある。そんな中、私の恩師となる固体物理化学の教授の講義がとても面白く、3年生の頃からその先生の研究室に足を運んだ。先生は指導が厳しいことに定評があったためか、学生には全く人氣がなく、配属されると教授、助手、技官が揃う研究室に4年生が2人という、なかなか大変な状況であった。このような環境では、教職員とのディスカッションが日常的に行われる。これは、学部で教科書とあらかじめ結果がわかっている学生実験しか知らない新米4年生にとっては、それなりにタフな環境である。

ある日、測定した実験データを持って、教授室に報告に行った時のことである。まず、結果を4年生なりに一生懸命報告した。それに対して返ってきた教授の言葉は「それで？」であった。

た。次に、自分なりに考えた考察を話したが、また「それで？」という質問が返ってきた。そこで頭が真っ白になり、何を答えたのかよく覚えていないが、それに対してまた「それで？」という質問が返ってきたことはよく覚えている。自分の意見について3段階深い考察を求められるというのは今でもタフなことであるが、自分のやっている実験の意味さえよくわかっていないレベルであった私にとって、この質問は本当に堪えた。そんな私に向かって、教授が「研究で出てきた実験データは生きている。今ここで起きている現象について、自分が学んだ教科書や論文の全ての知識を総動員して理解し、説明するようにしなさい。沈黙は金ではない」とおっしゃったことは深く記憶に残っている。当時の私にとって、この言葉を理解することは容易ではなく、実践するまでには長い年月がかかった。経営者となった今もこの言葉は私にとって貴重であり、自然科学や研究だけでなく、経営の世界でも生きるものであることを痛感する。経営を学ぶ教科書や先人たちが書いた本は数多ある。これを知識とし、今目の前で起きている事象にどう生かし、最善の判断をしていくのか問われている。